ミツバチ科学（1997）18(4)：180—184

養蜂博物館

井上　敦夫・井上　凱夫

1996年（平成8年）8月8日，養蜂の発展を願って，養蜂博物館が三国山の山腹にある三国高原みつばちセンター内にオープンした．三国山（尾張，三河，美濃の三国）は標高701m，愛知県尾張地方では一番高い山で，養蜂博物館は標高600m地点にある．付近は愛知国定公園の指定地域で東海自然歩道が縦貫し，山頂の岐阜県側は県立土岐自然公園で，夏季には自然を楽しむ家族連れや若者たちがたくさん訪れる．

三国高原みつばちセンターは山林，畑，宅地からなり総面積は約5ha（約15000坪），四方を山に囲まれ，中央の約5000坪が平地で，敷地内の山腹からは大切な水源となる清水が湧き出ている．中央の平地には，ミツバチの巣箱が並び，山を越えてせっせと蜜や花粉を取りに行く．

その一角に2階の窓から養蜂場が一望できるカナディアンシーダーハウスがあり，周りの山と調和して，自然にとけ込んだ風景を創っている（図1）．これが展示館で，総面積は約320㎡，中央が吹き抜けで両側が2階建ての山荘風である．中に入ると，木の香りがして，今人気のアロマテラピーを思い出させる．

窓から見える周りの山林は東京大学演習林に隣接する自然林である．その演習林の官舎で生まれ育った私達が1957年に瀬戸から名古屋市へ移り，父の退職後の仕事として養蜂業に着手したが，縁あって30余年もたった今，瀬戸市に21世紀の養蜂基地をつくることになった．

開館の目的

ミツバチと人間との関わりは，「ハチミツの歴史は人類の歴史」といわれる程深い関係にある．われわれの祖先は山野に生息するミツバチの自然巣からハチミツを取り，それを食し，また歴史的にも最初のお酒をつくることに成功し，ハチミツを搾ったあとの蜂の巣を炊いて蜂ろうを得，それを材料にしてロウソクを考え出して灯りのある生活をつくり出した．人間はやがて，ミツバチを飼いならすことに成功し，計画的にハチミツを生産し，蜂ろうを生産し始めた．

このように大変古い歴史をもったミツバチでありながら，養蜂のことはあまり知られていない．確かに，昔に比べれば，テレビ，ラジオ，新聞，雑誌，書物を介して，ミツバチや養蜂のこと，そしてハチミツやその他のミツバチ生産物について知る機会は非常に多くなったが，生きたミツバチを直接養蜂場で見たり，ハチミツの香りを楽しみながら，ハチミツがどのようにして蜂の巣から採集されるのかを見る機会にはなかなか恵まれないのが現実である．

ミツバチの巣箱の中はどうなっているのか，蜂の巣はどう作られるのか，その有様を自分の眼で直接見ることができたらどんなにか楽しい

図1　三国高原みつばちセンター内の養蜂博物館とその内部の展示室（右）

図2　巣箱の展示コーナー（左：ニホンミツバチ，中：近代巣箱，右：スケップ）

ことだろう．そして，ミツバチと人間との間に創り出される文化を同時に見られるような資料館があったら，きっとミツバチへの親しみも一層大きくなるのではないだろうか．言葉で表現できないミツバチに代って，一人でも多くの人に伝えたい，そのための養蜂博物館である．

蜂の巣箱や分離機，その他のいろいろな養蜂器具にしても，いずれ使い古されて，この世から消えてしまう．養蜂業を営む立場からは，ミツバチと人間との間に創り出されるそうした諸々の歴史的資料を少しでもまとまった形で保存し，後の世代へ残しておきたい．それは，かわいいミツバチのためにも，私たち養蜂にたずさわる者のためにも大切なことにちがいない．

全国の養蜂家の皆さんのお力をお借りし，また海外の蜂友の助けを借りて，長い年月をかけてコツコツと集めて来た諸々の集積が，このミュージアムを成している．

主な展示物

1　ミツバチの巣箱

a）ニホンミツバチの巣箱

対馬の蜂ドウをはじめ，九州地方の重箱式巣箱，紀州・愛媛・長野の日本蜂巣箱，分蜂群を収容する時に使う“笠”と呼ばれる小道具，そして対馬のものによく似た韓国の丸太巣箱が展示される（図2左）．

b）日本の近代巣箱

わが国へセイヨウミツバチがはじめて輸入されたのは明治10年で，それ以降，西洋式養蜂技術が普及した．大正から昭和初期の純欧米型巣箱からその後の改良巣箱，現在使用されている転飼用巣箱までの歴史を追う（図2中）．

c）スケップ

ヨーロッパでは長い歴史をもつ麦わらで編んだ釣り鐘型巣箱．各国のさまざまな大きさのものに，ピラミッド式，巣枠式スケップ（グラーベンホルスト式），スワン型スケップ，ウエディングビーハイブ（ヨーロッパでは新婚夫婦にミツバチをプレゼントする風習があった）等約20個余りのスケップが並ぶ（図2右）．

d）その他海外の巣箱

イギリスの伝統的WBC巣箱は王者の風格，フランスの屋根型巣箱，アメリカのラングストロス式巣箱，インドネシアのトウヨウミツバチ用装飾巣箱，旧ユーゴスラビアの装飾巣門，ペルシャ時代土瓶で飼っていた頃の陶板製の装飾巣門，シリアの水瓶利用の巣箱，アメリカで開発されたフェロモン利用の分蜂群待箱等も展示される．スペースの都合で順次お見せしたい．

e）世界の交尾箱

女王蜂の大量養成用に，女王蜂1匹と1,000匹前後の働き蜂を収容する交尾箱と呼ばれる小さな巣箱がある．大きさはラングストロス式巣枠の寸法の1/8から1/4が一般的である．木製のものが多く，一部スチロール製の巣箱も登場している．各国それぞれ創意工夫がある．

2　世界の燻煙器（beesmoker）

ミッバチは時には人や家畜を刺すこともある．養蜂家といえども，誰しも刺されたくないし，ミツバチは刺せば自分の命を失う．そこで刺されないように，ミツバチに煙を吹きかけ

て，蜂をおとなしくさせる．そのための種々の燻煙器が各国で考案されている．

ブラジルで猛威をふるうアフリカ蜂化ミツバチ用の世界一大きな燻煙器，移動養蜂舎や蜂舎内での管理に使用する世界一小さいドイツ製のパイプ型燻煙器，バッテリーやネジ巻を利用した吹子の部分がオートマチックに作動して煙を送り出す燻煙器などなど，世界中から集められた30種類余りの燻煙器は個性的で壮観，当館自慢のコレクションで，養蜂家の関心を集めている．日本人には日本の燻煙器が一番使い易いのは当然なことながら，それぞれ独特の工夫が見られ，感心させられる．

3　ハチミツ分離機と蜜こし器

ハチミツを分離するための遠心分離機，大正時代のものと思われる3枚掛分離機は古さを感じさせる．9枚掛放射状分離機は初期のものを展示する．

蜜こし器は遠心分離機で分離したハチミツを濾過して缶へ移し入れる過程で使うものであるが，大小様々のタイプがあり，養蜂家にとっては大切な器具である．

4　その他の養蜂管理用具

以上の他にミツバチの飼育管理のためにはいろいろな小道具が考案されている．覆面布や手袋，ハイブツール，蜂ブラシ，ローヤルゼリー採集用の道類，花粉トラップ，プロポリス採集板，圧搾製蠟器などを場所の許す限り展示する．

5　ミツバチ生産物

世界各国から集められた種々のハチミツが，それぞれのお国柄の容器に収められ展示される．オオミツバチやコミツバチ，トウヨウミツバチのハチミツなどの他，アロマテラピーで有名になったラベンダー，ユーカリ，タイム，ボダイジュ等のハーブ類のハチミツも多々ある．花粉やローヤルゼリー，プロポリスなどの製品も，錠剤あり，ドリンクありでにぎやかである．

6　ハチミツ酒（ミード，mead）

ブドウ酒と並んで，歴史的に最も古い部類に入るハチミツ酒やハニーワイン，ハチミツ入りリキュール．飲んだらさぞかしおいしかろうが，

図3　ハニーポット展示コーナー

大切な展示品なので封印されたままである．ポーランドで苦労して手に入れたミードボトルとミードカップも珍しい．

7　蜂ろうロウソクとキャンドルスタンド

蜂ろうロウソクはアメリカやヨーロッパの養蜂家にとって重要な生産物の一つである．溶けたろうに芯を垂らしてつくるディッピングタイプから，シリコン，ラバーあるいは金属やガラスでできた型の中へろうを流し込んでつくるモールディングタイプ，着色された巣模様のろう板を芯を軸にして巻いてつくるワックスシートローリングタイプのキャンドルまで，形をみているだけでも楽しい．キャンドルにはなくてはならないホルダーやスタンドも種類が豊富．キャンドルスタンドやランプ専門の博物館もあるくらいでその奥行きは深い．

8　ハニーポット

ハニーポットとはハチミツを卓上で使うための装飾容器で，日本ではあまりなじみがないが，欧米では非常に古くから使われている．陶磁器製のものが圧倒的に多いが，ガラス，プラスチック，銀などの金属製もある．形は様々であるが，伝統的なスケップを基調としたものが多い（図3）．日本の古いものとしては，おそらく輸出用として昭和15年頃に作られたくられたもので，蜂の翅はかけてなくなっている．有名なノリタケの資料館にも残っていないMORIMURAの文字の入ったハニーポットも希少品だ．第二次世界大戦後，占領統治下時代につくられた作品もあり，底面にMade in occupied Japanと記されたものも数点ある．ハニーポッ

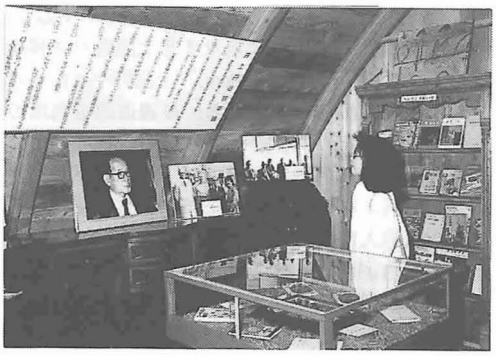

図4　先代井上丹治コーナー

トは相当な数が輸出用に作られたが，日本国内ではほとんど販売されず，当館に展示されているものは，海外の蜂友の協力でアメリカやヨーロッパから里帰りしたものである．

ハニーポットと共にミルクサーバー，水差し，バター皿，調味料入れなどがセットになったものもあり，それがすべて蜂や蜂の巣のデザインである．スケップを基調にしたキャンデーボックスやチーズトレーもまたおもしろい．

9　貯金箱

ミツバチはよく働きよく貯える，勤勉・貯蓄のシンボルとしてデザインに登場することが多く，貯金箱にもミツバチの巣箱を形どったものがある．金属製，木製，陶製のものなどで，欧米のものが多い．

10　クマとハチミツ

クマはハチミツと蜂の子が大好物である．そのため，毎年クマによる蜂の被害は世界的に大である．それでも，クマと蜂の巣をモチーフにしたグッズはハニーポットや調味料入れにもとり入れられ，テーブルに飾られる．クマは人間と長い歴史をもち，それなりに愛すべき動物なのである．

11　ミツバチと頑具

ミツバチに因んだぬいぐるみやおもちゃも子供たちに人気がある．数少ないが日本や中国の蜂凧もある．

刺針をもつミツバチやマルハナバチでも，おもちゃになるところをみると，愛らしい昆虫として歓迎されている証拠といえよう．

12　ミツバチのコインと切手

ミツバチや蜂の巣のデザインはコインにも登場するが，数は少ない．一番古いのは古代ギリシャのコインで，紀元前200年前後のものが多い．今から2000年以上も前からコインに登場して可愛がられていたということは，人間とミツバチの関りがいかに深かったかを物語っている．その他，イタリー，マルタ，ノルウェー，フランス，トンガなど数か国のものがある．

ミツバチは切手の中にいろいろな意味をこめて登場する．繁栄・経済発展のシンボルとして，貯蓄の，あるいは団結・勤勉のシンボルとしてよく登場する．国や州，地方のエンブレムにもさりげなく登場する．昆虫としてのミツバチ，産業としての養蜂など直接なものも，国際養蜂会議を記念したものもあり，種類が多い．

13　その他

ミツバチの絵皿，ブローチ等のアクセサリー，メダル，エジプト遺蹟の中に登場するミツバチの聖刻文字のレプリカ，養蜂風景や花の写真，先代井上丹治のコーナー（図4），養蜂バッヂや国際養蜂会議のポスター等，場所の許す限り展示されている（図5）．オオスズメバチの大きな根株につくられた巣もすばらしい．

図5　展示室兼集会所．中央は房柱博士（中国）

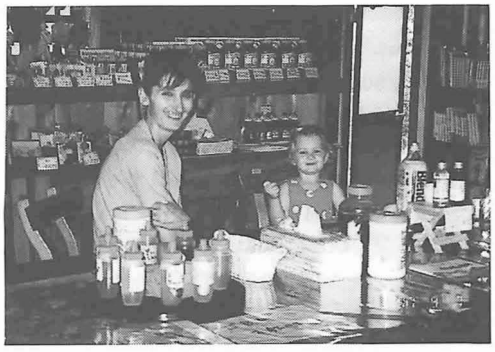

図6　ハチミツ試食コーナー

図7　実際に巣箱の中を見てみる

14　蜜しぼりの実演

事情の許す限り，来館者向けに1日数回，蜜しぼりの実演をしている．家族づれの皆さんに好評で，甘い香りがただよう中で，しぼりたてのハチミツを味わってもらう．希望者には蜜ブタの試食もして頂いている．また，館内にいろいろなハチミツの試食コーナーを設けて，各自で味わって，ハチミツが花の種類によって味が異なることを知ってもらう（図6）．

巣箱の中を実際に自分の眼で見てみたいとの希望も受けるが，人手や天候の都合で応じられないこともある（図7）．

15　おみやげコーナー

ハチミツをはじめローヤルゼリー，プロポリス，蜂の子，養蜂書籍，養蜂器具（一部分），ミツバチグッズなど，スペースの許す限り用意して，来館者の好評を博している．

養蜂博物館データ

〒480-12
愛知県瀬戸市上品野町1665
開館日：平成10年度（1998）は4月下旬～11月上旬までの毎週金曜・土曜．
開館時間：午前10時～午後4時（入館は午後3時まで）．
入館料：小中学生・高校生1人300円，大学生・大人1人500円．
予約：来館は予約が必要．来館日と人数，電話番号を下記あてに連絡．予約連絡先：052 - 792 - 1183．当日は0561 - 41 - 3833でも可（団体の場合は特に事前の打合せをしたい．道路幅の問題で大型の観光バスは通行できない）．
交通：自家用車の場合は国道248号線で品野交番前の交叉点を363号線に入りＪＲ上品野バス停から三国山山頂へ向け約4km．上品野バス停からは分岐点に案内表示がある．高速道路を利用の場合は中央高速多治見インターが最寄り．
電車の場合は名鉄瀬戸線で尾張瀬戸駅下車（終点）駅前よりタクシーで約25分．名古屋駅からは中央線大曽根駅で名鉄瀬戸線に乗りかえるか，又は名古屋駅より地下鉄藤ケ丘行で栄で下車，名鉄瀬戸線に乗りかえる．名古屋駅から尾張瀬戸駅までの所要時間は約1時間．

INOUE, ATSUO and YOSHIO INOUE. Apicultural Museum of Japan. *Honeybee Science* (1997) 18 (4): 180–184. 1665 Kami-Shinano-cho, Seto-shi, Aichi Prefecture. 480-12 Japan.

This article is to introduce the "Apicultural Museum of Japan" founded 1996 by authors in the mountainous area of Aichi Prefecture.

Collections are follows; traditional bee hives for Japanese honeybees, historical bee hives for European honeybees in Japan, skeps and modern hives from Europe and America. Various types of smokers from the world, old and modernhon honey extractors and other bee equipment; from bee hives, various products of honey (incl. mead), royal jelly, propolis, bee pollen, beeswax (incl. candles), and bee venom are being displayed. Especially, the collection of various honey pots with other tableware is one of the features of this museum. Bee coins including one from ancient Greek (2200 years before), medals, badges, broaches, etc. Also, post stamp collection is vast one. An apiary nearby with 200 colonies for honey and pollination is also available practical material for visitors.

The museum is open on Friday and Saturday from the end of April to early November. Open hour is 1000-1600 hrs. Prior contact before visit is required. Address: 1665 Kami-Shinano-cho, Seto-shi, Aichi Prefect. 480-12 Japan. Contact tel & fax: +81-561-41-3833 or Nagoya office, c/o Bee Culture Laboratory Inc., 2773-160 Kitayama Obata, Moriyama-ku, Nagoya City, 463 Japan. Tel: +81-52-792-1183 and fax: +81-52-792-2025.